

福島県持続性の高い農業生産方式 の導入に関する指針

福島県

令和2年3月

福島県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

第1	指針策定の背景	1
第2	趣旨	1
第3	持続性の高い農業生産方式	1
第4	持続性の高い農業生産方式の内容	
1	穀類	
(1)	水稲	7
(2)	麦類	15
(3)	大豆	17
(4)	ソバ	18
(5)	小豆	19
(6)	エゴマ	20
(7)	ベニバナインゲン	21
(8)	ナタネ	22
(9)	ラッカセイ	23
2	野菜	
(1)	キュウリ	24
(2)	トマト	26
(3)	ミニトマト	29
(4)	イチゴ	32
(5)	サヤインゲン	33
(6)	ピーマン	34
(7)	ナス	35
(8)	カボチャ	36
(9)	オオバ	37
(10)	ニガウリ (ゴーヤ)	39
(11)	オクラ	39
(12)	ダイコン	41
(13)	キャベツ	42
(14)	ブロッコリー	45
(15)	ハクサイ	47
(16)	コカブ	48
(17)	ニラ	49
(18)	ハウレンソウ	51
(19)	シュンギク	52
(20)	グリーンアスパラガス	54
(21)	ネギ	58
(22)	結球レタス	59
(23)	グリーンピース	60
(24)	サヤエンドウ (スナップエンドウ含む)	61
(25)	未成熟ソラマメ	62
(26)	タマネギ	63
(27)	ミズナ	64

(28)	未成熟トウモロコシ	6 5
(29)	エダマメ	6 6
(30)	アサツキ	6 7
(31)	ウド	6 9
(32)	ゴボウ	7 0
(33)	ニンジン	7 1
(34)	バレイショ	7 2
(35)	サトイモ	7 3
(36)	ナガイモ	7 4
(37)	ヤーコン	7 5
(38)	なばな類 (オータムポエム、くきたちな、こうさいたい、さいしん、つぼみな等)	7 6
(39)	コマツナ	7 7
(40)	ニンニク	7 8

3 果樹

(1)	モモ	7 9
(2)	リンゴ	8 0
(3)	日本ナシ	8 1
(4)	カキ	8 2
(5)	ブドウ	8 3
(6)	オウトウ	8 4
(7)	スモモ	8 5
(8)	西洋ナシ	8 6
(9)	イチジク	8 7
(10)	キウイフルーツ	8 8
(11)	ウメ	8 9
(12)	ブルーベリー	9 0
(13)	ネクタリン	9 1

4 花き

(1)	キク	9 2
(2)	トルコギキョウ	9 3
(3)	宿根カスミソウ	9 4
(4)	リンドウ	9 5
(5)	ストック	9 6
(6)	カラー	9 7

5 飼料作物

(1)	飼料用米	9 8
(2)	稲ホールクロップサイレージ	1 0 0
(3)	飼料用トウモロコシ	1 0 6
(4)	ソルガム	1 0 7

別表		1 0 8
----	--	-------

第 5	持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項	1 0 8
-----	----------------------------------	-------

福島県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

第1 指針策定の背景

農業が、将来にわたりその多様な機能を発揮していけるようにするためには、農業生産のあり方について、環境と調和しつつ、持続的な生産を行うことが可能であるという農業本来の特質を十分生かせるようなものとするのが重要である。

このため、従来から土づくりや化学肥料・農薬の低減を図ってきたところであるが、このような農業生産方式への農業者段階における取り組みはいまだ不十分であり、土づくりの減退、化学肥料や農薬への過度の依存による農地の生産力の低下、営農環境の悪化といった状況や、湖沼や地下水などへの負荷も懸念されているところである。

また、一方では、化学肥料・農薬の使用を控えた農産物等に対する消費者ニーズが高まっている。

このような状況に鑑み、「持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律」が施行され、気象条件など自然条件を考慮して適切に区分した地域ごとに、当該農作物及び地域の特性に即し、環境と調和のとれた持続的な農業を推進するため、たい肥等を活用した土づくりと化学肥料・農薬の使用の低減を一体的に行う「持続性の高い農業生産方式」の普及浸透を図り、これら技術に一体的に取り組む農業者（以下「認定農業者」という。）に対する支援措置を講じることとなったところである。

第2 趣旨

環境にやさしい農業の推進にあたっては、平成4年10月19日に策定した「福島県環境保全型農業推進指針」に沿って、環境保全型農業の生産現場での理解と取組みを促進する全県的規模の運動の展開や、その実践に必要な技術の確立と普及のための対策等を、総合的に推進してきたところである。

今般、国の法律を受け、将来にわたって農業生産を持続的に行うことができる農業生産方式の導入を推進すべく、同法第3条に基づき、福島県持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針（以下「導入指針」という。）を定め、これら農業生産方式の導入の促進を図ることとする。

本導入指針は、農業者が目標とすべき作物別、地域別の具体的な生産方式を明らかにするものであり、農業者が法に基づく農業改良資金の対象となるための必要な導入計画の作成及びその認定の前提となるものである。

第3 持続性の高い農業生産方式

持続性の高い農業生産方式とは、生産物の量や質の水準を維持しつつ、土壌の性質に由来する農地の生産力の維持増進その他良好な営農環境の確保に資すると認められる合理的な農業の生産方式である。すなわち、土づくりのための有機質資材の施用、肥料の施用及び有害動植物の防除に関する技術のうち土壌の性質を改善する効果が高いもの、化学的に合成された肥料の施用を減少させる効果が高いもの及び化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高いものすべてを用いて行われるものであって、以下の技術をいう。

- 1 たい肥その他の有機質資材の施用に関する技術であって、土壌の性質を改善する効果が高い技術
 - (1) たい肥等有機質資材施用技術
土壌有機物含有量、可吸態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、たい肥その他の有機質資材であって炭素窒素比がおおむね10から150の範囲にあるものを農地に施用する技術をいう。
 - (2) 緑肥作物利用技術
土壌有機物含有量、可吸態窒素含有量その他の土壌の性質について調査を行い、その結果に基づき、緑肥作物を栽培して、農地にすき込む技術をいう。
- 2 肥料の施用に関する技術であって、化学的に合成された肥料を減少させる効果が高い技術
 - (1) 局所施肥技術
肥料を作物の根の周辺に集中的に施用する技術をいう。
 - (2) 肥効調節型肥料施用技術
肥料取締法（昭和25年法律第127号）第2条第2項に規定する普通肥料（以下「普通肥料」という。）のうち、アセトアルデヒド縮合尿素、イソブチルアルデヒド縮合尿素、オキサミド、石灰窒素、被覆加里肥料、被覆窒素肥料、被覆複合肥料、ホルムアルデヒド加工尿素肥料若しくは硫酸グアニル尿素、これらの肥料の一種以上が原料として配合されるもの又は土壌中における硝酸化成を抑制する材料が使用されたものを施用する技術をいう。
 - (3) 有機質肥料施用技術
有機質（動植物質のものに限る。）を原料として使用する肥料を施用する技術をいう。
- 3 有害動植物の防除に関する技術であって、化学的に合成された農薬の使用を減少させる効果が高い技術
 - (1) 温湯種子消毒技術
種子を温湯に浸漬することにより、当該種子に付着した有害動植物を駆除する技術をいう。
 - (2) 機械除草技術
有害植物及び畦畔における有害動物の発生を助長する植物を機械的方法により駆除する技術をいう。
 - (3) 除草用動物利用技術
有害植物を駆除するための小動物の農地における放し飼いをいう。
 - (4) 生物農薬利用技術
農薬取締法（昭和23年法律第82号）第1条の2第2項の天敵であって、同法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを利用する技術をいう。

(5) 対抗植物利用技術

土壤中の有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止する効果を有する植物を栽培する技術をいう。

(6) 抵抗性品種栽培・台木利用技術

有害動植物に対して抵抗性を持つ品種に属する農作物を栽培し、又は当該農作物を台木として利用する技術をいう。

(7) 天然物質由来農薬利用技術

有効成分が化学的に合成されていない農薬として農林水産大臣が定めるものを利用する技術をいう。

(8) 土壌還元消毒技術

土壤中の酸素の濃度を低下させることにより、土壤中の有害動植物を駆除する技術をいう。

(9) 熱利用土壌消毒技術

土壌に熱を加えてその温度を上昇させることにより、土壤中の有害動植物を駆除する技術をいう。

(10) 光利用技術

有害動植物を駆除し、又はそのまん延を防止するため、有害動植物を誘引し、若しくは忌避させ、又はその生理的機能を抑制する効果を有する光を利用する技術をいう。

(11) 被覆栽培技術

農作物を有害動植物の付着を防止するための資材で被覆する技術をいう。

(12) フェロモン剤利用技術

農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とする薬剤であって、農薬取締法第2条第1項又は第15条の2第1項の登録を受けたものを使用する技術をいう。

(13) マルチ栽培技術

土壌の表面を有害動植物のまん延を防止するための資材で被覆する技術をいう。

持続性の高い農業生産方式の作物・作型一覧

区分	作物・作型名	対象		たい肥等施用技術		化学肥料低減技術					化学農薬低減技術										
		露地	ハウス	たい肥等	緑肥作物	局所施肥	肥効調節 施肥	有機質 施肥	温湯種子 消毒	機械除草	除草用 動物	生物農薬	対抗植物	抵抗性品 種・台木	天然物質 由来農薬	土壌還元 消毒	熱利用 土壌消毒	光利用	被覆栽培	フェロ モン剤	マルチ 栽培
穀類	水稲	○		○	○	○	○	○	○	○				○							○
	麦類	○		○	○	○	○	○	○	○				○							○
	大豆	○		○	○	○	○	○	○	○				○							○
	ソバ	○		○	○		○	○		○											
	小豆	○		○	○		○	○		○					○						○
	エゴマ	○		○	○		○	○		○											○
	ペニバナインゲン	○		○	○	○	○	○		○		○									○
	ナタネ	○		○	○		○	○		○											
	ラッカセイ	○		○	○	○	○	○		○											○
野菜	キュウリ	夏秋栽培		○	○	○	○	○				○	○	○	○		○	○	○		○
		促成栽培		○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○		
		半促成栽培		○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○		
		抑制栽培		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○		
	トマト	夏秋栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○		○	○	○		
		促成栽培		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○		
		抑制栽培		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○		
	ミニトマト	夏秋栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○		○	○	○		
		促成栽培		○	○	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○	○		
	イチゴ	促成栽培		○	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○		
		半促成栽培		○	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○		
	サヤインゲン	○	○	○	○	○	○	○							○		○	○	○		○
	ピーマン (カラーピーマン含む)	夏秋栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○		○	○	○		○
	ナス	夏秋栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○		○	○	○		○
	カボチャ		○		○	○		○	○		○				○		○	○	○		○
	オオバ	夏秋栽培		○	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○		○
		秋冬栽培		○	○	○	○	○	○				○		○	○	○	○	○		○
	ニガウリ (ゴーヤ)		○		○	○	○	○	○				○	○	○		○	○	○		
	オクラ	露地栽培	○		○	○	○	○	○		○			○				○	○		○
	ダイコン	夏どり栽培	○		○	○		○	○				○	○	○			○	○		○
		秋冬どり栽培	○		○	○		○	○				○	○	○			○	○		○
	キャベツ	夏秋どり栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○			○	○		○
		秋冬どり栽培	○		○	○	○	○	○				○	○	○			○	○		○
	ブロッコリー	初夏どり栽培	○		○	○	○	○	○				○		○			○	○		○
秋冬どり栽培		○		○	○	○	○	○				○		○			○	○		○	
ハクサイ		○		○	○	○	○	○		○			○	○			○	○		○	
コカブ			○	○	○	○		○				○		○	○			○			
ニラ	夏どり栽培	○		○	○		○	○						○			○	○		○	
	秋冬どり栽培		○	○	○		○	○						○			○	○		○	
ホウレンソウ		○	○	○	○		○	○						○	○	○	○	○		○	

持続性の高い農業生産方式の作物・作型一覧

区分	作物・作型名		対象		たい肥等施用技術			化学肥料低減技術					化学農薬低減技術											
			露地	ハウス	たい肥等	緑肥作物	局所施肥	肥効調節肥	有機質施肥	温湯種子消毒	機械除草	除草用動物	生物農薬	対抗植物	抵抗性品種・台木	天然物質由来農薬	土壌還元消毒	熱利用土壌消毒	光利用	被覆栽培	フェロモン剤	マルチ栽培		
野菜	シュンギク	抜きとり栽培	○	○	○	○		○	○						○		○	○	○			○		
		摘みとり栽培	○	○	○	○		○	○						○		○	○	○				○	
	グリーンアスパラガス	露地栽培	○		○		○	○	○		○		○		○		○	○					○	
		露地二期どり栽培	○		○		○	○	○		○		○		○		○	○					○	
		ハウス二期どり栽培		○	○		○	○	○		○		○		○		○	○		○			○	
		伏せ込み栽培	○		○		○	○	○		○		○		○		○	○					○	
	ネギ			○	○		○	○		○		○			○		○			○	○			
	結球レタス			○	○	○	○	○		○		○			○		○			○			○	
	グリーンピース			○	○	○	○	○				○											○	
	サヤエンドウ (スナップエンドウ含む)			○	○	○	○	○				○		○	○								○	
	未成熟ソラマメ			○	○	○	○	○		○		○					○						○	
	タマネギ			○	○	○	○	○		○		○			○		○						○	
	ミズナ		○	○	○	○	○	○				○			○		○			○			○	
	未成熟トウモロコシ			○	○	○	○	○									○			○			○	
	エダマメ			○	○	○	○	○		○		○			○		○			○			○	
	アサツキ	露地栽培	○		○	○		○	○			○			○									
		ハウス栽培		○	○	○		○	○			○			○		○			○				
	ウド (伏せ込み栽培)			○	○	○	○	○		○		○					○						○	
	ゴボウ			○	○	○	○	○		○		○			○									
	ニンジン			○	○	○	○	○				○			○						○			○
	パレイショ			○	○	○	○	○		○					○									○
	サトイモ			○	○	○	○	○				○			○									○
	ナガイモ			○	○	○	○	○		○		○			○									○
ヤーコン	露地栽培	○		○	○	○	○		○		○			○									○	
なばな類 (オータムボエム、くきたちな、こうさいたい、さいしん、つぼみな、なばな等)	露地栽培	○		○	○	○	○		○		○			○				○	○				○	
	ハウス栽培		○	○	○	○	○		○		○			○		○		○	○				○	
コマツナ	露地栽培	○		○	○	○	○		○		○			○				○	○				○	
	ハウス栽培		○	○	○	○	○		○		○			○		○		○	○				○	
ニンニク			○	○	○	○	○		○		○			○		○			○				○	
果樹	モモ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	リンゴ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	日本ナシ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	カキ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	ブドウ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	オウトウ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	スモモ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	西洋ナシ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	イチジク			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	キウイフルーツ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	ウメ			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	ブルーベリー			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	
	ネクタリン			○	○		○	○		○		○		○	○			○	○				○	

持続性の高い農業生産方式の作物・作型一覧

区分	作物・作型名	対象		たい肥等施用技術		化学肥料低減技術					化学農薬低減技術										
		露地	ハウス	たい肥等	緑肥作物	局所施肥	肥効調節 施肥	有機質 施肥	温湯種子 消毒	機械除草	除草用 動物	生物農薬	対抗植物	抵抗性品 種・台木	天然物質 由来農薬	土壌還元 消毒	熱利用 土壌消毒	光利用	被覆栽培	フェロ モン剤	マルチ 栽培
花 き	キク	○	○	○		○	○	○		○		○			○	○	○	○	○		○
	トルコギキョウ		○	○			○	○		○					○	○	○	○	○		○
	宿根カスミソウ	○	○	○			○	○		○					○		○	○	○		○
	リンドウ	○	○	○			○	○		○					○		○	○	○		○
	ストック		○	○			○	○		○		○				○	○		○		○
	カラー	○	○	○			○	○		○							○		○		○
飼 料 作 物	飼料用米	○		○	○	○	○	○	○	○				○							○
	稲ホールクroppサイレージ	○		○	○	○	○	○	○	○				○							○
	飼料用トウモロコシ	○		○	○	○	○	○		○			○								○
	ソルガム	○		○	○	○	○	○		○			○								○

※雨除け栽培は、保温目的ではなく、雨による作物の濡れ等を防止する目的で、作物の上部のみを被覆する施設での栽培を指し、「露地」に区分した。

第4 持続性の高い農業生産方式の内容

1 穀類

(1) 水稲

ア 水稲（浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めると共に、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等、***天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ 水稻(会津平坦)

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病害虫の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めると共に、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥(側条施肥等)を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。(カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。) ○マルチ栽培を行う。(対象:雑草) ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効率を高める。 ○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等、***天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

ウ 水稲（山間・山沿い地域）

本地域は灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。また、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすい。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等の施用や生わらの腐熟促進により、地力を維持、向上させ、低温に強い稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進させる。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。また、健苗の育成により初期生育を確保すると共に、栄養診断に基づき効率的な追肥を行う。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため、以下の除草技術を実施するとともに水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下** 8.0kg/10a以下***
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等、***里山のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ 水稲（湛水直播栽培 浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的な利用により雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

オ 水稲（湛水直播栽培 会津平坦）

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病害虫の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的利用により雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

カ 水稻（湛水直播栽培 山間・山沿い地域）

本地域は灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。また、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすい。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等の施用や生わらの腐熟促進により、地力を維持、向上させ、低温に強い稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進させる。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。また、健苗の育成により初期生育を確保すると共に、栄養診断に基づき効率的な追肥を行う。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため、以下の除草技術を実施するとともに水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。また、種子の加温処理と適期播種により出芽・苗立ちを促進させると共に、代かき後から播種までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効果的な利用を行い雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効果的利用により雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

キ 水稻（乾田直播栽培 浜通り・中通り平坦）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により地力を維持・向上させ、気象変動に強い稲作を進める。なお、生わらの施用は気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、土壌の碎土率を上げ出芽・苗立ちを安定させると共に、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下*
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌の碎土率（70%以上）を上げ出芽・苗立ちの促進に努める。 ○水田の漏水を防止し、施肥窒素の利用率を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ク 水稻（乾田直播栽培 会津平坦）

本地域は、灰色低地土が多く、比較的肥沃な土壌が多いが、場所により耕深が浅い等課題のある圃場も見られる。夏季の気象は安定しており、日照時間が比較的多いことから、病虫害の発生が少なく、収量・品質が安定している地域である。しかし、土壌診断に基づいて、完熟たい肥等の施用や施用生わらの腐熟促進により、地力を維持し、気象資源を有効に活用した稲作を進める必要がある。なお、生わらの施用は、気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥には、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や側条施肥等の局所施肥法を用い、施肥窒素の利用率を向上させる。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類等の耕種的防除を励行する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。また、土壌の碎土率を上げ出芽・苗立ちを安定させると共に、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下*
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌の碎土率（70%以上）を上げ出芽・苗立ちの促進に努める ○水田の漏水を防止し、施肥窒素の利用率を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等および天のつぶ

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) 麦類

ア 麦類 (浜通り・中通り・会津平坦)

本地域の麦類は、主として、水田の転換作物として栽培されている。水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。

また、麦の播種時期は、秋の長雨により遅れることが多く、湿害が発生しやすく初期生育が遅れやすい。また、登熟期間が梅雨に遭遇するため病害の発生により、品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断に行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い施肥窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。

また、赤かび病は必ず適期防除を行うこと。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 ○麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料等を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下* 16.0kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う (中耕等)。 ○マルチ栽培を行う。 ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○赤かび病の適期防除を必ず行うこと。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*一般品種、**麺用品種 (ゆきちから等)

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用 (経歴) ごとに合計した数である。

イ 麦類（会津山間・山沿い）

本地域は、主として、畑作および水田の転換作物として栽培されている。灰色低地土、グライ土、多湿黒ボク土などが多く、積雪量が多いため根雪期間が比較的長いことから、初期生育量さらに越冬後の生育量の確保が困難であり、さらには病害の発生も多く収量が低下しやすい地域である。

また、麦の播種時期は、秋の長雨により遅れることが多く、湿害が発生しやすく初期生育が遅れやすい。さらに、登熟期間が梅雨に遭遇するため病害の発生により、品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断に行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い施肥窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。

また、赤かび病は必ず適期防除を行うこと。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 ○麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料等を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下* 16.0kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う（中耕等）。 ○マルチ栽培を行う。 ○温湯種子消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○赤かび病の適期防除を必ず行うこと。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*一般品種、**麺用品種（ゆきちから等）

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) 大豆

大豆は、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。また、大豆の生育時期は、梅雨と重なり、長雨により湿害が発生しやすく生育が遅れやすい。梅雨に遭遇するため、病害の発生や泥の付着により品質が低下しやすい。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用する。

施肥は、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い、窒素の利用率を向上させる。

除草では、除草剤の使用を節減するため輪作体系を構築し、マルチ栽培や機械による作付け前の除草、中耕を徹底する。また、紫斑病等の適期防除に努め、品質の向上を図る。

このため、基本技術を励行すると共に、病虫害発生予察情報を活用し、発生初期の防除に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。(直前施用は避ける。) ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 ○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a ※輪作体系の場合は前作に施用したたい肥との合計量とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を行う。 	化学肥料窒素成分量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う(中耕等)。 ○マルチ栽培(リビングマルチ栽培等)を行う。(対象:雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数(合計) 7回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○紫斑病の適期防除に努めること。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) ソバ

ソバは、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性や化学性の点で課題が多い。そばは、湿害に弱く、収量が不安定である。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に、土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材を施用すると共に、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培・施用し、地力の維持を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 ○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 0.3t/10a以上
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 1.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○作付け前に機械除草を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(5) 小豆

小豆は、主に中通りや会津地方の中山間地を中心に栽培されており、排水が良好で保水力に富む埴壤土や壤土が適する。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材及び完熟たい肥の施用、又は緑肥を栽培・施用し、地力の維持向上を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 2.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草（中耕等）を行う。 ○マルチ栽培（リビングマルチ栽培等）を行う。 （対象：雑草） ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて土壌改良資材やたい肥等の施用量を調整する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(6) エゴマ

エゴマは、主に中通りや会津地方の中山間地を中心に栽培されている。土壌条件による生育の影響は少ないが、湿害や前作の残存窒素量には注意が必要である。このため、ほ場の排水対策を実施すると共に土壌診断を行い、石灰等土壌改良資材及び完熟たい肥の施用、又は緑肥を栽培・施用し、地力の維持向上を図る。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の使用量を節減する。

除草では機械による作付け前の除草を徹底する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 0.3 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 2.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草（中耕等）を行う。 ○マルチ栽培（リビングマルチ栽培等）を行う。 （対象：雑草） 	化学農薬使用 回数（合計） 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のため排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて土壌改良資材やたい肥等の施用量を調整する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(7) ベニバナインゲン (はなまめ) <露地栽培>

ベニバナインゲンマメは排水の良い砂土や粘質土壌によく生育する。県内では高冷地や中山間地の火山灰土壌の畑地帯でも栽培されている。

特に湿地や水の停滞しやすい土地、酸性土壌では生育が不良となるため、深耕や排水性を確保するとともに、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材等を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

また、連作による生育不良が起こりやすいため、他野菜との組み合わせによる輪作を行うようにする。施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法(液肥土壌灌水等)を行う。 	化学肥料窒素 分量 4.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する (対象害虫：ハスモンヨトウ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○機械除草を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 3回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(8) ナタネ

ナタネは、畑作および水田転換作物として栽培されている。ナタネは環境適応性が極めて高い作物で、耐寒雪性に強く、乾燥に耐える。直根が太く地下深く入るので、黒ボク土など軽しょう土でも麦類のような凍上害を受けにくい。ナタネの耐湿性は麦類より強いが、幼苗期には弱いので排水溝を設置し、排水の良好なほ場を選ぶことが肝要である。また、ナタネの連作地や花崗岩質土壌、黒ボク土などでは、ホウ素欠乏により萎縮や不稔が発生することがあるので、土壌診断を行い、ホウ砂及び石灰等土壌改良資材を施用し、完熟たい肥の施用または緑肥を栽培施用する。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、施肥窒素の利用率を向上させ、化学肥料の節減を図る。

除草は、作付け前の除草を徹底する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施肥技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦桿を直ちにすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 1 t / 10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	○作付け前に機械除草を行う。	化学農薬使用 回数 (合計) 0回
その他の留意事項	○排水溝を設置し、排水の良好なほ場を選ぶ。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用 (経歴) ごとに合計した数である。

(9) ラッカセイ

ラッカセイは、畑作および水田転換作物として栽培されている。本県の水田土壌は灰色低地土が多く、土壌の物理性、化学性や地力の点で課題が多い。また、生育期間中、長雨等による湿害で生育が遅れ、収量と品質が低下するため、排水の良いほ場を選択するか排水対策を実施し作付する。

施肥は、土壌診断結果に基づいた土壌改良や適正施肥と共に、肥効調節型肥料、有機質肥料の施用や局所施肥法を用い、窒素の利用率を向上させる。さらに、完熟たい肥または緑肥の施肥による土づくりを行う。

雑草防除は、除草剤の使用を節減するため、マルチ栽培や管理機による中耕等を徹底する。また、病害虫防除は、発生初期防除による適期防除に努め、防除回数と収量・品質の向上を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。(直前施用は避ける。) ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらを秋にすき込み、土中たい肥とする。 ○麦作付け後の麦稈を直ちにすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う(中耕等)。 ○マルチ栽培を行う(対象:雑草)。 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○湿害防止のためほ場の排水対策は必ず行うこと。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

2 野菜

(1) キュウリ

ア キュウリ（夏秋栽培） <露地栽培>

夏秋キュウリは、主に褐色森林土や黒ボク土に属する土壌で栽培されており、物理性や化学性において課題のあるほ場が多い。栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、耕深や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、整枝、摘果、摘葉等適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、過剰施用を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬の利用、雨除け被覆栽培、シルバーポリマルチ栽培、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水、点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 45.6kg/10a以下 (目標収量 11t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：ウリノメイガ等) ○対抗植物を栽培する。 (対象病虫害：センチュウ等) ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病虫害：べと病等) ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類等の害虫) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：うどんこ病、つる割病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要となる。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ キュウリ（促成・半促成・抑制栽培） <ハウス栽培>

施設キュウリ栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害や土壌センチュウの被害が懸念される場合は、半促成栽培終了後に太陽熱等を利用した消毒を行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※前作と併せ年1回の施用とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 促成 32.0kg/10a以下 （目標収量12t） 半促成 32.0kg/10a以下 （目標収量8t） 抑制 20.0kg/10a以下 （目標収量6t）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病虫害：オンシツコナジラミ等） ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類等） ○対抗植物を輪作する。 （対象病虫害：センチュウ等） ○抵抗性品種・台木を利用する。 （対象病虫害：うどんこ病、つる割病等） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) トマト

ア トマト（夏秋栽培） <露地栽培>

トマト栽培ほ場は、黒ボク土壌や沖積土壌に属する土壌が多く、ほ場により土壌の性質が異なっている場合が多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる窒素量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 29.6kg/10a以下 (目標収量 10t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { 対象病害虫：オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病等 } ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○マルハナバチを導入する場合はUVカットフィルムは使用しない。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ トマト（促成栽培）

＜ハウス栽培＞

施設トマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やは場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.8kg/10a以下 (目標収量 12t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：オオタバコガ、コナジラミ類〕 〔灰色かび病等〕 ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、コナジラミ類等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵を使用する場合は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○マルハナバチを導入する場合は、UVカットフィルムは使用しないこと。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ トマト（抑制栽培）

＜ハウス栽培＞

施設トマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※前作と併せ年1回の施用とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病虫害：オオタバコガ、コナジラミ類〕 〔灰色かび病等〕 ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、コナジラミ類等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：青枯れ病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵を使用する場合は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○マルハナバチを導入する場合は、UVカットフィルムは使用しないこと。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) ミニトマト

ア ミニトマト（夏秋栽培） <露地栽培>

雨除けミニトマト栽培土壌は、養分集積が進んでいることが多いので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または養液土耕法を用いる。施用量は、土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬や防虫ネットの活用や、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 対象病虫害：オオタバコガ、コナジラミ類 灰色かび病等 </div> ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：萎ちょう病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ ミニトマト（促成栽培） <ハウス栽培>

栽培土壌は、耕土が深く腐植に富む土壌がよい。このため作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等の施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、養液土耕栽培法を用いる。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や防虫ネットの活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、ラノーテープを利用し発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲ワラをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲ワラ 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (目標収量 8 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：オオタバコガ、アブラムシ類 コナジラミ類、灰色かび病等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：オオタバコガ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害：萎ちょう病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ、UVカットフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20% 削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(4) イチゴ

ア イチゴ（促成栽培） <ハウス栽培>

イチゴは肥料濃度に特に敏感であり、長期間、安定した肥効が重要である。しかし、施設土壌は養分集積が進み、塩類過剰による生育障害が発生しやすい圃場が多い。したがって、完熟たい肥等を施用し、土壌診断に基づく土壌養分管理を行い、肥沃で排水性の良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を用いる。また、施用量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮して決定し、適正な養分濃度とバランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、育苗時は雨除け栽培を行い、生物農薬や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 17.6kg/10a以下 (目標収量 4t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハダニ類、ハンスモンヨトウ アブラムシ類、うどんこ病等 ○ハウスの開口部を防虫ネットで被覆する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハスモンヨトウ アザミウマ類等 ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○育苗はハウス雨除けで行い、降雨による炭そ病の発生を予防する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ イチゴ（半促成栽培） <ハウス栽培>

イチゴは肥料濃度に特に敏感であり、長期間、安定した肥効が重要である。しかし、施設土壌は養分集積が進み、塩類過剰による生育障害が発生しやすい圃場が多い。したがって、完熟たい肥等を施用し、土壌診断に基づく土壌養分管理を行い、肥沃で排水性の良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を用いる。また、施用量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮して決定し、適正な養分濃度とバランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、育苗時は雨除け栽培を行い、生物農薬や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 18.4kg/10a以下 （目標収量 3.5t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病害虫：ハダニ類、ハンスモンヨトウ アブラムシ類、うどんこ病等） ○ハウスの開口部を防虫ネットで被覆する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ アザミウマ類等） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（ラノーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○育苗はハウス雨除けで行い、降雨による炭そ病の発生を予防する。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(5) サヤインゲン <露地栽培・ハウス栽培>

サヤインゲンは主に褐色森林土や黒ボク土に属するほ場で栽培されており、物理性や化学性において課題のあるほ場が多い。サヤインゲンは栽培が長期間に及び、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過多を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、雨除け栽培、防虫ネットの被覆やマルチ栽培を行い、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また土壌消毒には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※たい肥は年1回の施用である。また、雨除け栽培の場合は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 1.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○雨除け栽培を行う。（対象病虫害：炭そ病等） ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類、アザミウマ類等） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(6) ピーマン（カラーピーマン含む）（夏秋栽培） <露地栽培>

ピーマンは阿武隈山間地や中通りを中心に栽培されている。この地域の土壌は褐色森林土に属する土壌が多く、排水性・保水性や土壌の腐植量において課題のあるほ場が多い。ピーマンは栽培が長期間に及び、乾燥や施肥量過多は尻腐果の発生原因ともなるので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、保水性に優れた土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を施用するか、局所施肥法を行う。また、施肥量は土壌やたい肥に含まれる養分量を考慮し、適正な土壌養分バランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬の利用、対抗植物によるセンチュウ防除、マルチ栽培や雨除け栽培、防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。また土壌消毒には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○秋に稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 ○緑肥作物を栽培する。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合 は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を基肥として施用する。 ○有機質肥料を基肥として施用する。 ○局所施肥法(液肥土壌灌水等)を行う。 	化学肥料窒素 成分量 28.0kg/10a (目標収量 5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：オオタバコガ、アザミウマ類、アブラムシ類等) ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○ハウス雨除け栽培を行う。 (対象病害虫：斑点病、疫病) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオニジュウヤホシテントウ、オオタバコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草、疫病) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：ウィルス病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(7) ナス（夏秋栽培） <露地栽培>

ナスは阿武隈山間地や中通りの水田地帯を中心に栽培されている。この地域は灰色低地土に属する土壌が多く、排水性や保水性、地力などに課題のある土壌が多く見られる。ナスは栽培が長期間に及ぶので、土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、水はけの良い土づくりを行うことが重要である。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を行う。施肥量は、土壌やたい肥に含まれる窒素量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬や対抗植物の活用、マルチ栽培、雨除け栽培や防虫ネットの活用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 ○緑肥作物を栽培する。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合 は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 36.8kg/10a以下 (目標収量 6 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象害虫：オオタバコガ、アブラムシ類等) ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチユウ等) ○雨除け栽培を行う。(対象病害虫：疫病等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：オオタバコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：青枯れ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 現行の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(8) カボチャ <露地栽培>

カボチャは、果菜類の中では強健な作物であり、各種の土壤に適するが、りん酸欠乏の火山灰土壌では活着が悪く、一般的には砂壤土から壤土が適する。また、排水の不良なほ場では疫病や果実の腐敗が発生しやすくなる。このため、土壤診断に基づき完熟たい肥等や土壤改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壤及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、マルチ栽培やしきわらにより疫病の発生を抑える。

雑草防除は、機械除草やマルチ栽培、しきわらにより、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生育初期の被覆資材によるトンネル栽培を行う (対象病害虫：アブラムシ等) ○マルチ栽培を行う。 (対象病害虫：疫病、アブラムシ、雑草) ○熱利用土壤消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壤診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(9) オオバ

ア オオバ（夏秋栽培） <ハウス栽培>

施設栽培のオオバは、1作の栽培期間が4～6か月の長期に及ぶため、肥料切れせず、安定した肥効を持続し、均一な新葉を展葉させるための土壌環境の整備が重要である。また一般に、同一の施設で連続して栽培されるため、土壌への養分集積による生育障害の発生が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、施設内の土壌水分、温湿度、通気などの環境を整え、また、ほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：斑点病、アブラムシ類、雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ オオバ（秋冬栽培） <ハウス栽培>

施設栽培のオオバは、1作の栽培期間が4～6か月の長期に及ぶため、肥料切れせず、安定した肥効を持続し、均一な新葉を展葉させるための土壌環境の整備が重要である。また一般に、同一の施設で連続して栽培されるため、土壌への養分集積による生育障害の発生が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、施設内の土壌水分、温湿度、通気などの環境を整え、また、ほ場衛生を徹底するとともに、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法（点滴液肥灌水等）を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.0kg/10a以下 (収量目標 1.6t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ハダニ類、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：斑点病、アブラムシ類、雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数（合計） 標準の20%削減する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○点滴液肥灌水法は、土壌溶液や植物体の分析結果を踏まえて行う。 ○天敵は、効果を高めるため導入時期や温度管理を適正にする。 ○防虫ネットは、夏期の通気性を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(10) ニガウリ（ゴーヤ） <露地栽培>

ニガウリは、栽培が長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要である。このため、土壌診断に基づき、完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、耕深や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、整枝、摘果、摘葉等適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策やほ場衛生を徹底し、生物農薬の利用、雨除け被覆栽培、シルバーポリマルチ栽培、防虫ネットの活用や対抗植物によるセンチュウ防除、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a ※雨除け栽培の場合 は上記の1/2とする。
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水、点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 36.0kg/10a以下 （収量目標 4.5t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 （対象病虫害：ウリノメイガ等） ○対抗植物を栽培する。 （対象病虫害：センチュウ等） ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 （対象病虫害：べと病等） ○ハウスまたは合掌支柱を防虫ネットで被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類等の害虫） ○抵抗性品種・台木を利用する。 （対象病虫害：つる割病等） ○熟利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 標準の20%削減 する。
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○栽培は長期間に及ぶので、排水性と安定した肥効が必要となる。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(11) オクラ <露地栽培>

オクラは吸肥力が強く、収穫期間が長いため、保肥力の大きい肥沃な土壤が適する。

このため、土壤診断に基づき完熟堆肥や土壤改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壤及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、マルチ栽培などにより発生軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を用いる。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 1.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：ヨトウムシ、オオタバコガ等) ○対抗植物を栽培する。 (対象病虫害：センチウ) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類等) ○機械除草を行なう。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壤診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(12) ダイコン

ア ダイコン（夏どり栽培） <露地栽培>

夏ダイコンは高冷地の畑地に長年栽培されており、連作による病害虫の増加が見られる。また、栽培土壌は淡色黒ボク土壌が多く、物理性、化学性や地力において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

この作型は普通栽培より肥効が良いため、窒素過多により病害発生や品質低下を招きやすいので、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定するとともに、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は生物農薬の利用、対抗植物との輪作、被覆栽培やフェロモン剤の利用に加え、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 12.0kg/10a以下 (収量目標 4.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 〔対象病害虫：軟腐病、アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○被覆栽培を行う。 〔対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：萎黄病等) ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ ダイコン（秋冬どり栽培） <露地栽培>

秋冬ダイコンは畑作地域を中心に長年栽培されており、連作による病害虫の増加が見られる。栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用、対抗植物との輪作、被覆栽培やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg/10a以下 (収量目標 5 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 〔対象病害虫：軟腐病、アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○被覆栽培を行う。 〔対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等〕 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：萎黄病等) ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(13) キャベツ

ア キャベツ（夏秋どり栽培） <露地栽培>

キャベツは畑作地域を中心に長年栽培されており、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。栽培土壌は褐色森林土や黒ボク土壌が多く、物理性や化学性において課題のある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、対抗植物、フェロモン剤や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ) ヨトウムシ等 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ) ヨトウムシ等 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ キャベツ（秋冬どり栽培） <露地栽培>

キャベツは畑作地域を中心に長年栽培されており、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。栽培土壌は褐色森林土や黒ボク土壌が多く、物理性や化学性において課題のある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及び堆肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、対抗植物、フェロモン剤や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.8kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等 ○対抗植物を利用する。 (対象病害虫：センチュウ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等 ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(14) ブロッコリー

ア ブロッコリー（初夏どり栽培） <露地栽培>

ブロッコリーは土地利用型作物として長年栽培されており、連作による土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。また、栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体に使用するか局所施肥法を用いるなど過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、輪作に努め、被覆資材による害虫の寄生防止、生物農薬やフェロモン剤等の利用、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○たがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ ヨトウムシ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○病害虫防除のために輪作に努める。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ ブロccoliリー（秋冬どり栽培） <露地栽培>

ブロッコリーは土地利用型作物として長年栽培されており、連作による土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られる。また栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用いる。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、被覆資材による害虫の寄生防止、生物農薬やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を利用する。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (収量目標 1 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：コナガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーポリマルチ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(16) コカブ <ハウス栽培>

コカブは都市近郊地帯の野菜として定着していたが、需要が増加し輸送園芸地帯でも周年生産されるようになった。栽培土壌は、砂質土壌が最も良いとされている。また、窒素の肥効が最も大きく、次いでカリであるが生育日数が短いため全量基肥でも良い。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、有機質肥料を使用するか局所施肥法等を行う。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や防虫ネットの活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥(年1回) 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下 (目標収量 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害: コナガ、ヨトウムシ等) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害: アブラムシ類、コナガ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病虫害: アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ等) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病虫害: 根こぶ病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは、対象病虫害を考慮して選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(17) ニラ

ア ニラ（夏どり栽培） <露地栽培>

夏ニラは主に中通りや会津地方の中山間地に栽培されており、連作により土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られる。また栽培土壌は褐色低地土などが多く、物理性や腐植量において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及び堆肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底するとともに、雨除け栽培、被覆資材の利用、発生に応じた適期防除を行う。また土壌病害防除は太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 56.0kg/10a以下 (収量目標 4 t /10a) ※施肥窒素量は2年 間分の合計である。
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：株腐細菌病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：ネギコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ ニラ（秋冬どり栽培） <ハウス栽培>

秋冬ニラは主に中、浜通り平坦部に長年栽培されており、連作により土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られる。また、栽培土壌は褐色低地土などが多く、物理性や腐植量において課題のある場合が多い。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策や収穫期のハウス換気を行うとともに、雨除け栽培、被覆資材の利用、発生に応じた適期防除を行う。また、土壌病害病除には、太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 2 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 54.4kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a) ※施肥窒素量は2 年間分の合計であ る。
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○株養成期間のフィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：株腐細菌病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：ネギコガ等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 20回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(18) ホウレンソウ <露地栽培・ハウス栽培>

夏どりほうれんそうは主に中山間地での栽培が多く、年4～5回の作付けとなることから、土壌養分の蓄積や病害虫の発生が見られ、収量が不安定なほ場が見られる。また、栽培土壌は黒ボク土壌が多く、地力や化学性に課題がある土壌が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、雨除け栽培、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、被覆資材を利用し、発生に応じた適期防除により行う。また、土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a ※たい肥は年間当たり 施用量
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 1.2 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：べと病等) ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：べと病等) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(19) シュンギク

ア シュンギク（抜きとり栽培） <露地栽培・ハウス栽培>

シュンギクは主に施設果菜類の後作として栽培されているため、土壌養分過多になりやすい。土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、発生に応じた適期防除により行う。土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

また、雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 2 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○防虫ネットを被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、ハモグリバエ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着テープ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病害虫を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

イ シュンギク（摘みとり栽培） <露地栽培・ハウス栽培>

シュンギクは主に施設果菜類の後作として栽培されているため、土壌養分過多になりやすい。土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、生物農薬の利用、ハウス開口部への防虫ネットの被覆、発生に応じた適期防除により行う。土壌病害防除には太陽熱等を利用した消毒法を用いる。

また、雑草防除には、しきわらやポリマルチを利用し、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 4 t /10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○防虫ネットを被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ハモグリバエ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着テープ等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害を考慮し選定する。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(20) グリーンアスパラガス

ア グリーンアスパラガス（露地栽培） <露地栽培>

アスパラガス露地栽培は会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 40.0kg /10a以 下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病害虫：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 13回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ グリーンアスパラガス（露地二期どり栽培） <露地栽培>

アスパラガス露地栽培は会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。	化学肥料窒素 成分量 45.6kg/10a以下 (収量目標 0.8t/10a)
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病虫害：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病虫害：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 16回以内
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ グリーンアスパラガス（ハウス二期どり栽培） <ハウス栽培>

アスパラガスハウス二期どり栽培は会津地方を中心に水田転作物として栽培されている例が多い。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料、有機質肥料の使用や局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、下葉の整理により通気性を確保し、生物農薬の利用、マルチ栽培、雨除け栽培、発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（点滴液肥灌水等）を行う。	化学肥料窒素 成分量 52.0kg/10a以下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を使用する。 (対象病害虫：ハスモンヨトウ等) ○夏秋期間のマルチ栽培を行う。(対象病害虫：茎枯病) ○夏秋期間のフィルム等による雨除け被覆栽培を行う。(対象病害虫：茎枯病等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（粘着テープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 12回以内
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○2年目以降のマルチは、しきわらやメデルシート等を用いる。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ グリーンアスパラガス（伏せ込み栽培） <露地栽培>

アスパラガスは会津地方を中心に土地利用型作物や水田転作物として栽培されている。栽培土壌は黒ボク土壌や灰色低地土が多く、地力や化学性に課題のある土壌が多い。また、定植後の土壌改良は困難なので、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬の利用や、下葉の整理により通気性を確保し、しきわらやポリマルチによるマルチ栽培と発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を用い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥を（点滴液肥灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 40.0kg/10a以下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。（対象：雑草） ○生物農薬を使用する。 （対象病害虫：ハスモンヨトウ等） ○マルチ栽培を行う。（対象病害虫：茎枯病等） ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（シルバーテープ等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(21) ネギ <露地栽培>

浜通りの砂壤土地帯を中心に栽培され、中通り、会津にも栽培されている。栽培年数が長い産地では土壌養分の蓄積や病害虫の増加が見られ、また物理性や腐植量において課題のあるほ場が多い。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、雨除け栽培やフェロモン剤の利用、発生に応じた適期防除により行う。

雑草防除には機械除草を行い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 25.6kg/10a以下 (収量目標 4 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を使用する。 (対象病害虫：シロイチモジヨトウ等) ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：べと病等) ○フェロモン剤を利用する。 (対象病害虫：ハスモンヨトウ等) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 16回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(22) 結球レタス <露地栽培>

レタスは、根が土壌の表層に浅く分布し、一般的には砂壤土から壤土の耕土の深いほ場が適する。また、排水の不良なほ場では菌核病、軟腐病、灰色かび病が発生しやすくなる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法を用い過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、生物農薬、被覆資材の利用、排水対策の徹底、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の節減に努める。

雑草防除は、機械除草やマルチ栽培により、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 4 t / 10 a 稲わら 1 t / 10 a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○局所施肥法を行う。 ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 13.6kg / 10a以下 (収量目標 2 t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：ヨトウムシ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：アブラムシ、雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 7回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(23) グリーンピース <露地栽培>

グリーンピースは排水の良い壤土や粘質土壌に適し、県内では県北地方や会津地方の畑地帯で主に栽培されている。直根性であるため、土壌は膨軟で、通気性に富み、作土の深いほ場が適している。

また、グリーンピースは連作を嫌い、生育不良から収量が低下し易いため 4～5年の休閑をとることが望ましい。このため、他野菜との輪作体系をとるほか、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。特に実エンドウで収穫することから、草勢を落としやすいため、追肥は遅れないよう注意し、施肥量は土壌及びたい肥に含まれる量を考慮しながら窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟たい肥を施用する。 ○ 緑肥作物を栽培・施用する。 ○ 稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 有機質肥料を施用する。 ○ 局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 32.0kg/10a以下 (収量目標 2 t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生物農薬を利用する (対象害虫：うどんこ病、灰色カビ病) ○ マルチ栽培を行う。(対象：雑草) 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。 ○ たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(24) サヤエンドウ（スナップエンドウ含む） <露地栽培>

サヤエンドウは排水の良い壤土や粘質土壌に適し、県内では県北地方や会津地方の畑地帯で主に栽培されている。根は深根性で滞水には極めて弱く、排水不良地では枯れ上がりや病気の発生が多い傾向にある。

また、連作を嫌い、生育不良から収量が低下し易いため 4～5年の休閑をとることが望ましい。このため、他野菜との輪作体系をとるほか、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、または局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (目標収量 1.0t)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する (対象病害：うどんこ病、灰色かび病、ヨトウムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○抵抗性品種・台木を利用する。 (対象病害虫：うどんこ病等) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(25) 未成熟ソラマメ <露地栽培>

ソラマメは根の酸素要求量が多く、また水分の要求度が高いため、通気性、排水性が良く、保水量のあるほ場条件を整備することが必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 9.6kg /10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：うどんこ病、灰色かび病、ヨトウムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(26) タマネギ <露地栽培>

タマネギは土壌適応性は広いが、好適 pH は 6.3～7.0 程度で微酸性～中性土壌が適する。肥大開始以降は土壌水分を多く必要とする。根は好気性で表面に張り、過湿状態では生育が阻害される。また、球の肥大には、生育初期から肥大開始時に養分が欠乏しないことが必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：灰色かび病、ヨトウムシ等) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(27) ミズナ <露地栽培・ハウス栽培>

ミズナは土壌適応性は広いが、商品化率を高めるためには葉柄が細く、株の揃いが良好なことが重要である。そのため、肥効が安定し保水力のある土壌条件を整備することが必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や被覆資材の利用、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：コナガ) ○防虫ネット被覆栽培やべたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：コナガ、アブラムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 3回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(28) 未成熟トウモロコシ <露地栽培>

トウモロコシ栽培は、土壌適応性が広いものの、砂地及び重粘土を除く、肥沃な土壌が適する。作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等の施用し、土作りを十分に行うことが重要である。また、吸肥力はきわめて強い。栄養生長期には吸収量は少ないが、節間伸長が始まると急激に増加する。窒素はそのころからしだいに吸収量を増し、登熟初期頃まで非常に多くなり、成熟期に最高となる。リン酸は成熟期までゆるやかに吸収され、カリは生育初期から絹糸抽出期までに吸収量が多い。したがって、施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用する。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、マルチ栽培やべたがけ栽培を活用し、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (目標収量 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○マルチ栽培を行う。 ○生育初期にべたがけ栽培を行う。 (対象病虫害：アブラムシ類) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(29) エダマメ <露地栽培>

エダマメは、土壌への適応性は広いが、酸性土壌はきらい、最適pHは6.0～6.5である。また、乾燥や過湿条件では着莢不良、子実の肥大不良等をおこすため、保水力が高く肥沃な土壌が適する。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や被覆栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 1 t/10a 稲わら 0.5t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 6.4kg /10a以下 (収量目標 0.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：灰色かび病、ヨトウムシ類) ○マルチ栽培を行う。(対象病虫害：雑草) ○被覆栽培を行う。 (対象病虫害：ダイズサヤタマ、バエ、カメムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(30) アサツキ

ア アサツキ <露地栽培>

栽培土壌は、掘り起こし水洗いするので土の落ちやすい土壌が良い。

したがって、たい肥は前作物の栽培で十分施用し、アサツキ栽培時には収穫後の水洗い時にたい肥が根についていると作業が困難となるので施さない。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、土作りを十分に行うことも重要である。

施肥には、肥効調節型肥料と有機質肥料を使用する。施肥量は土壌に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や生物的防除剤の活用、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥 (前作で) 1 t/10a 稲わら (前作で) 0.5 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 35.2kg/10a以下 (目標収量 0.75 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害: ヨトウムシ類) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用 (経歴) ごとに合計した数である。

イ アサツキ <ハウス栽培>

栽培土壌は、掘り起こし水洗いするので土の落ちやすい土壌が良い。

したがって、たい肥は前作物の栽培で十分施用し、アサツキ栽培時には収穫後の水洗い時にたい肥が根についていると作業が困難となるので施さない。しかし、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、土作りを十分に行うことも重要である。

施肥には、肥効調節型肥料と有機質肥料を使用する。施肥量は土壌に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬や生物的防除剤の活用、太陽熱等を利用した土壌消毒、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み土中たい肥とする。 	たい肥（前作で） 1 t/10a 稲わら（前作で） 0.5 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素 成分量 35.2kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ヨトウムシ類) ○ハウス開口部を防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、ネギハモグリバエ) ○太陽熱・蒸気・熱水を利用し土壌消毒を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(31) ウド（伏せ込み栽培） <露地栽培>

ウドは土壌の適応性は広いが、充実した根株を養成するためには湿害、乾燥害の影響が少なく、排水が良好で肥沃な土壌が望ましい。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0 kg/10a以下 (収量目標 1.2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：センノカミキリ、ヨトウムシ類) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。 (対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 	化学農薬使用 回数(合計) 5回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(32) ゴボウ <露地栽培>

ゴボウは特に湿害に弱く、排水がよく耕土の深い肥沃土が適する。県内では灰色低地土である河川沿岸の沖積地で表土の深い壤土や砂壤土で品質の優れたものが生産されている。また、連作や酸性土壌では生育が不良となるため、他野菜との組み合わせによる輪作を行うようにするほか、土壌診断に基づき完熟たい肥や土壌改良資材等を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し、土作りに努める。

施肥には肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥を行い、適正な栽培管理により草勢低下を防ぐ。施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮し、窒素過剰を避ける。

病害虫防除は、排水対策やほ場衛生を徹底するとともに、発生に応じた適期防除により薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 3 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法（液肥土壌灌水等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 （収量目標 2 t/10a）
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する （対象害虫：ネコブセンチュウ、ヨトウムシ類） ○機械除草を行う（対象：雑草）。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数（合計） 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(33) ニンジン

＜露地栽培＞

ニンジンは、種子の吸水力が弱いとため土壌が乾燥すると発芽率が低下し、また過湿状態でも発芽不良となる。また、作土層が浅い場合や緊密な土壌では岐根が発生しやすく、生育後半の多湿条件では裂根が発生しやすくなる。良質のニンジンを生産するためには、保水力があり排水良好で作土が深いほ場条件を整備することが必要である。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬や被覆資材の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.8kg/10a以下 (収量目標 2 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヨトウムシ類、ネコブセンチュウ) ○べたがけ栽培を行う。 (対象病害虫：キアゲハ等) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(34) バレイショ <露地栽培>

県内全域で栽培されており、砂壤土や壤土での作付けが多い。物理性や腐植量において課題のあるほ場が多く、また栽培年数が長いほ場では病害虫の増加が見られる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、マルチ栽培により疫病の発生を抑え、発生に応じた適期防除を行う。

雑草防除は、マルチ栽培や機械除草により行い、薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.8kg/10a以下 (収量目標 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：疫病、雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数(合計) 4回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(35) サトイモ <露地栽培>

サトイモの栽培土壌は、砂質土壌から埴壤土までと広く適応する。また、窒素は子いもの数を多くし、カリはイモの肥大に大きく関係する。さらに、栽培期間が長く乾燥に弱いため、たい肥の施用効果が高い。したがって、作付前に土壌診断による土壌養分管理を行い、完熟たい肥等を施用し、土作りを十分に行うことが重要である。

施肥には、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥を行う。施肥量は土壌やたい肥に含まれている養分量を考慮し、適正な養分バランスを保つ。病虫害防除は排水対策やほ場衛生を徹底すると共に、生物農薬の活用やマルチ栽培を行うなど、発生に応じた適期防除による薬剤散布の節減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 14.4kg/10a以下 (目標収量 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を使用する。 (対象病虫害：ハスモンヨトウ) ○マルチ栽培を行う (対象：雑草)。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数 (合計) 2回以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(36) ナガイモ（ジネンジョ含む） <露地栽培>

ナガイモは、イモの肥大・伸長が長さ1mほどに達する場合があります、一般に地中に垂直に伸長するため、耕土深の深いことが必要である。また、イモの形状に対する土壌条件の影響が大きく、砂土や火山灰土など軽しょうな土壌で形状のよいものが生産される。また、土壌が膨軟な場合は形状が良く、硬い土壌では曲がりいも、扁平いもが発生しやすく、排水が不良で滞水した場合は岐根イモの発生が多くなる。このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、トレンチャによる深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、マルチ栽培、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 24.0kg/10a以下 (収量目標 2.5t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：ヤマノイモコガ、ヨトウムシ類、ハスモンヨトウ) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 10回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(37) ヤーコン <露地栽培>

ヤーコンは、草丈が高く、葉が大きいいため、水分を多く必要とする。反面、土壌の過湿を嫌い、排水不良地、特に梅雨期に滞水するような土壌条件では、地上部の生育も悪く、塊根も腐敗しやすくなる。大きく良質な塊根を生産するためには、排水が良く、有機質に富んで保水性のある耕土の深い（最低15cm以上の）畑が望ましい。このため、できるだけ条件の整った畑地を選定するとともに、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用や機械除草、マルチ栽培などにより発生を軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 16.0kg/10a以下 (目標収量 3 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：コガネムシ類幼虫、ハスモンヨトウ) ○機械除草を行う。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 0回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(38) なばな類 (オータムボエム、くきたちな、こうさいたい、さいしん、つぼみな、なばな等)

＜露地栽培・ハウス栽培＞

なばな類は、土壌適応性は広いが、浅根性なので透水性、保水性、通気性の確保が重要である。また、施設果菜類の後作として栽培されることが多く、その場合は土壌養分過多になりやすい。

このため、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病虫害防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、べたがけ栽培、マルチ栽培などにより発生の軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 9.6kg/10a以下 (収量目標 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病虫害：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病虫害：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行なう (対象病虫害：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○機械除草を行なう。(対象病虫害：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病虫害：雑草) ○ハウス栽培では熱利用土壌消毒を行なう。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(39) コマツナ <露地栽培・ハウス栽培>

コマツナは、土壌適応性は広いが、直根が伸びるので土壌の排水性、保水性、通気性の確保が重要である。また、ハウスでの連続栽培や施設果菜類の後作として栽培されることが多く、その場合は土壌養分過多になりやすい。

このため、土壌診断に基づき完熟堆肥や土壌改良資材を適正に投入し、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量、また前作の残肥を考慮して決定し、有機質肥料を使用するか、局所施肥法により、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬、防虫ネットの活用、べたがけ栽培、マルチ栽培などにより発生の軽減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t /10a 稲わら 1 t /10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を使用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 10.4kg/10a以 下 (収量目標 1.2t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○防虫ネットで被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○べたがけ栽培を行なう。 (対象病害虫：アブラムシ類、アオムシ、コナガ、ヨトウムシ等) ○機械除草を行なう。(対象病害虫：雑草) ○マルチ栽培を行なう。(対象病害虫：雑草) ○ハウス栽培では、熱利用土壌消毒を行なう。 ○光利用技術(シルバーポリマルチ等)を行なう。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 2回
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行なう。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(40) ニンニク <露地栽培>

ニンニクは土壌適応性は広いが、好適pHは6.0～6.5程度で微酸性～中性土壌が適する。生育には、長い日数を必要とし、肥沃で耕土の深い畑が適する。球が肥大する時期には、特に水分が必要である。

このため、土壌診断に基づき完熟たい肥等や土壌改良資材を適正に投入し、深耕や排水性を確保するとともに、物理性・化学性及び生物性を改善し土づくりに努める。

施肥量は、土壌及びたい肥に含まれる量を考慮して決定し、肥効調節型肥料や有機質肥料を用いるか、局所施肥法を用い、過剰施肥を避ける。

病害虫防除は、排水対策を徹底し、生物農薬の利用、発生に応じた適期防除により、薬剤散布の低減に努める。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○稲わらをすき込み、土中たい肥とする。 	たい肥 2 t/10a 稲わら 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥法を行う。 	化学肥料窒素 成分量 20.0kg/10a以下 (収量目標 1 t/10a)
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 (対象病害虫：さび病、ヨトウムシ等) ○機械除草を行う。(対象：雑草) ○マルチ栽培を行う。(対象病害虫：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○フィルム等による雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：春腐病等) ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用 回数(合計) 6回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

3 果樹

(1) モモ <露地栽培>

本県のモモ栽培は、褐色森林土地帯に多く、その他褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土が浅いため、土壌診断に基づき良質な完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除を節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用量を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 9.6kg/10a以下* 14.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { 対象病害虫：ハマキムシ類、シャクトリムシ類、ケムシ類等 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 { 対象病害虫：モモハモグリガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類、コスカシバ等 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病害虫：ネコブセンチュウ等) ○光利用技術（黄色蛍光灯、シルバーフィルム等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 24回/年以下* 29回/年以下**
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用（1 t / 10 a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t / 10 a）でもよい。 	

注1) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*早生種、**中～晩生種

(2) リンゴ <露地栽培>

本県のリンゴ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土地帯等にも分布している。このうち褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬の使用を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除も節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

また、除草には機械除草を行い、除草剤の使用を削減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分 量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムシ類、シャクトリムシ類、ケムシ類等 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、キンモンホソガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病害虫：リンゴワタムシ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯、シルバークリアフィルム等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 33回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(3) 日本ナシ <露地栽培>

本県のナシ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土、黄色土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても、生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬や多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素分量 20.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムシ類、ケムシ類、シャクトリムシ類等 </div> ○多目的防災網を設置する。 ○性フェロモン剤を使用する。 <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-bottom: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 対象病害虫：ヒメボクトウ、ハマキムハ類、シンクイムシ類 </div> ○抵抗性品種を利用する。 (対象病害虫：黒斑病等) ○光利用技術(黄色蛍光灯等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 殺虫剤 8回/年以下 合計 34回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) カキ <露地栽培>

本県のカキ栽培は、褐色森林土や黒ボク土地帯に多く、その他褐色低地土地帯にも分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 8.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 } ○機械除草を行う。 ○光利用技術（シルバークリアフィルム等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 8回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(5) ブドウ <露地栽培>

本県のブドウ栽培は、巨峰、高尾などの大粒種を中心として、褐色森林土地帯、褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、生物農薬の利用や被覆栽培による果実腐敗性病害の発生を低減し、化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 4.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○被覆栽培を行う。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：黒とう病、晩腐病 べと病等 ○抵抗性台木を利用する。 (対象病害虫：フィロキセラ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 19回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(6) オウトウ <露地栽培>

本県のオウトウ栽培は、褐色森林土地帯、褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬の利用や被覆栽培による果実腐敗性病害の発生を低減し、化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○被覆栽培を行う。 (対象病害虫：灰星病、炭そ病等) ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病害虫：ハマキムシ類、コスカシバ シンクイムシ類等 ○光利用技術（黄色蛍光灯、シルバーフィルム、粘着資材等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 15回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(7) スモモ

＜露地栽培＞

本県のスモモ栽培は、県北地方を中心として褐色森林土地帯、褐色低地土や黄色土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土も浅いため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、生物農薬の利用により化学農薬の使用節減を推進する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 12.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 <ul style="list-style-type: none"> 〔対象病害虫：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等〕 ○多目的防災網を設置する。 ○性フェロモン剤を使用する。 <ul style="list-style-type: none"> 〔対象病害虫：ハマキムシ類、コスカシバ シンクイムシ類等〕 ○光利用技術（黄色蛍光灯等）を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 (合計) 15回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(10) キウイフルーツ <露地栽培>

本県のキウイフルーツ栽培は、相双地方や県北地方、県南地方を中心に褐色森林土地帯、褐色低地土地帯、黒ボク土地帯に分布している。褐色森林土など腐食量が少なく、表土の浅い土壌では土壌改良を目的として、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。また、地力を維持し、高品質果実を安定生産するためにも完熟たい肥を施用する。施肥は、地力を維持するとともに土壌環境保全の面からも有機質肥料を施用する。

除草は、機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素成分量 16.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。	化学農薬使用回数 5回/年以下
その他の留意事項	○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○毎年のたい肥施用（1 t/10a）により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用（1 t/10a）でもよい。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(13) ネクタリン <露地栽培>

本県のネクタリン栽培は、褐色森林土地帯に多く、その他褐色低地土、黒ボク土地帯に分布している。このうち、褐色森林土は腐植量が少なく、表土が浅いため、土壌診断に基づき良質な完熟たい肥を施用する。その他の土壌についても生産の安定と品質の向上のため、土壌診断に基づき完熟たい肥を施用する。

また、施肥は地力の維持や土壌環境の保全を目的として、有機質肥料を施用する。

害虫防除は、化学農薬を節減し、有用な天敵等を保護するため、性フェロモン剤の利用による防除法を推進する。また、ハダニ類の天敵を保護・利活用することにより、ハダニ類に対する薬剤防除を節減する。あわせて多目的防災網、黄色蛍光灯を利用し薬剤の使用量を節減する。

除草には機械除草を行い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○イネ科牧草を草生栽培し、刈草は樹冠下へ敷草する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○有機質肥料を施用する。 ○肥効調節型肥料を施用する。 	化学肥料窒素成分量 14.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：ハマキムシ類、ケムシ類 シャクトリムシ類等 ○多目的防災網を使用する。 ○性フェロモン剤を使用する。 { <ul style="list-style-type: none"> 対象病虫害：モモハモグリガ、ハマキムシ類、シンクイムシ類 コスカシバ等) ○抵抗性台木を利用する。 (対象病虫害：ネコブセンチュウ等) ○光利用技術(黄色蛍光灯、シルバーフィルム等)を用いる。 ○天然物質由来農薬を利用する。 	化学農薬使用回数 19回/年以下
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○性フェロモン剤を利用する場合は、天敵等に影響が少ない薬剤を選択し、天敵を利用した殺ダニ剤等の削減も同時に行うことが望ましい。 ○毎年のたい肥施用(1 t/10a)により、栽培管理上、生育上問題がある場合は、2年に1度のたい肥施用(1 t/10a)でもよい。 	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

4 花き

(1) キク <露地栽培・ハウス栽培>

キクは比較的浅根性であるため、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行うことが大切である。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。追肥は、生育状況に応じながら点滴液肥灌水等により必要量を与える。

キクは降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、展着剤の効果的な利用により殺菌剤の使用量を節減する。また、防虫ネット等による被覆や生物農薬の使用によって殺虫剤の使用量を節減する。さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、田畑輪換や太陽熱等を利用した土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

除草には機械除草を用い、除草剤の使用を節減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（点滴液肥灌水）を行う。	化学肥料窒素 成分量 12.0 kg /10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を利用する。 （対象病虫害：オオタバコガ） ○雨除け被覆栽培を行う。 （対象病虫害：白さび病等） ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 （対象病虫害：アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類等） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術（黄色蛍光灯、シルバーフィルム等）を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数（合計） 35回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(2) トルコギキョウ

<ハウス栽培>

トルコギキョウは本県の代表的な施設切り花であるが、特に土壌の物理性や塩類濃度等に生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量を追肥する。

トルコギキョウは初期生育が緩慢なため、雑草にまかれて欠株や病害発生を助長することがある。このため、これらの原因となる雑草の発生を抑制するため、機械除草やマルチ栽培を行い初期生育の促進と殺菌剤・除草剤の使用量を節減する。また、防虫ネット等の被覆によって害虫の飛来を防ぎ、殺虫剤の使用量を節減する。さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1 t /10a ※上限を2 t /10a とする
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 (対象病害虫：アブラムシ類、アザミウマ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着資材等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 8回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○F ₁ 品種は、固定種よりも窒素量を少なめにする等、品種により施肥を調整する。 ○防虫ネットは対象病害虫等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(3) 宿根カスミソウ <露地栽培・ハウス栽培>

宿根カスミソウは、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量の追肥を行う。

宿根カスミソウは、降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、生物農薬の使用、展着剤の効果的な利用により殺菌剤・除草剤の使用量を節減する。さらに連作によって土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気熱等消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1.5 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 11.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。(対象病虫害：疫病等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(UVカットフィルム等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 8回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○高温期は品質低下を防ぐため、降雨状況に応じて雨除けフィルムの被覆・除去を行う。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) リンドウ <露地栽培・ハウス栽培>

リンドウは栽培期間が長い作物であるため、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすく、良品質生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。

このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量の追肥を行う。

特にリンドウは酸性土を強く好み、畑地では土壌病害や線虫の被害を受けたり、乾燥によって品質低下となりやすいため、水田転換畑に作付することが望ましい。

また、除草については機械除草を行い、除草剤の使用量を節減するとともに、降雨によって病害が発生・伝染しやすいため、雨除けフィルム等による被覆やマルチ栽培、展着剤の効果的な利用により殺菌剤の使用量を節減する。また、施設においては防虫ネット等の被覆により害虫の飛来を防ぎ、殺虫剤の使用量を節減する。なお、防除にあたっては、発生予察情報や粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。さらに連作により土壌病害が発生しやすい圃場においては、太陽熱・蒸気等を利用した土壌消毒を積極的に行う。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。(施用時期は定植前に行う。)	たい肥 3 t /10a ※たい肥は定植前に施用する
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下 ※定植2年目以降の年間施用量である
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。 (対象病虫害:葉枯病等) ○ハウス開口部を防虫ネット等で被覆する。 (対象病虫害:リンドウホソハマキ、アザミウマ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象:雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。 ○光利用技術(粘着資材等)を行う。 ○天然物質由来農薬を利用する。	化学農薬使用 回数(合計) 23回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○エゾリンドウ系は、水田転換畑に作付することを原則とする。 ○褐色根腐病対策として排水対策を行う。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(5) ストック <ハウス栽培>

ストックは比較的栽培期間が短いため、ハウスの有効活用として補完的な導入も多い品目である。そのため、特に生育が前作の残存窒素成分の影響を受けやすい。このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を軽減する。また、生育状況に応じながら必要量を追肥する。

特にストックは、コナガの被害を受けやすいため、防虫ネット等の被覆や生物農薬の使用によって殺虫剤の使用量を節減する。また、雑草防除では機械除草やマルチ栽培を行い、除草剤の使用量を節減する。

さらに、連作によって土壌病害が発生しやすい圃場では、太陽熱や蒸気等の土壌消毒を行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 2 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 12.8kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○生物農薬を使用する。(対象病虫害:コナガ) ○ハウス開口部を防虫ネット等による被覆を行う。 (対象病虫害:コナガ、アブラムシ類等) ○マルチ栽培を行う。(対象:雑草) ○土壌還元消毒を行う。 ○熱利用土壌消毒を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 6回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○防虫ネットは対象病虫害等を考慮して選定する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(6) カラー <露地栽培・ハウス栽培>

県内では、比較的透水性の良いほ場を好む畑地性カラーを中心に栽培されており、土壌条件により生育・品質が大きく影響されやすいことから、良品質生産のためには適切な土壌・肥培管理が必要である。

このため、定植前に圃場の土壌診断を実施し、この診断結果に基づいて良質なたい肥や土壌改良資材を適量施用し、積極的な土づくりを行う。

施肥は、肥効調節型肥料や有機質肥料を主体とし、土壌診断結果に基づいた適正な施用量とする。その際、たい肥に含まれる可給態窒素、リン酸、カリ等の肥料成分を十分考慮し、施肥量を調整する。また、生育状況に応じながら追肥を行う。

カラー栽培では土壌病害が発生しやすいため、雨除けフィルム等による被覆や遮光資材による地温上昇防止により殺菌剤の使用量を節減する。また、雑草防除では機械除草や敷きわらマルチ栽培を行い、除草剤の使用量を節減する。

さらに連作によって土壌病害が発生しやすいほ場においては、太陽熱・蒸気熱等消毒による土壌消毒を積極的に行う。なお、防除にあたっては、粘着トラップ等の利用に基づいた適期防除に努め、効率的かつ効果的な防除を図る。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
堆肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。	たい肥 1 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。	化学肥料窒素 成分量 6.4kg/10a以下
化学農薬低減技術	○機械除草を行う。 ○雨除け被覆栽培を行う。 (対象病害虫：軟腐病等) ○マルチ栽培を行う。(対象：雑草) ○熱利用土壌消毒を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 4回以下
その他の留意事項	○土壌診断の結果に基づいて施肥量やたい肥の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○品質低下や軟腐病の発生を防ぐため、遮光資材により地温上昇を防止する。	

注) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

5 飼料作物

(1) 飼料用米

ア 飼料用米（専用品種・移植栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ飼料用米生産に適した特性を持っている。

水田の地力維持・向上のため完熟たい肥等の施用や生わらのすき込みを行う。なお、生わらのすき込みは気温が高いうちに行い、土壌中での腐熟を促進する。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。収量向上を図るため多肥栽培を行い葉色を濃くするが、飼料の品質確保と作業の効率化のため倒伏しないよう注意が必要である。

病虫害防除では、主食用米に比べ使用できる薬剤の種類と時期が限られているため注意する。このため温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制の耕種的技術に取り組むことが重要である。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は飼料用米の生産・給与技術マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ 飼料用米（専用品種・湛水直播栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ飼料用米生産に適した特性を持っている。直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、収量に影響の大きい出芽・初期生育の安定確保や適切な雑草防除に注意が必要である。

水田の地力維持・向上のため完熟たい肥等の施用や生わらのすき込みを行う。なお、生わらのすき込みは気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。収量向上を図るため多肥栽培を行い葉色を濃くするが、飼料の品質確保と作業の効率化のため倒伏しないよう注意が必要である。

病虫害防除では、主食用米に比べ使用できる薬剤の種類と時期が限られているため注意する。このため温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制の耕種的技術に取り組むことが重要である。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は飼料用米の生産・給与技術マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) 稲ホールクロップサイレージ（以下、稲WCS）

ア 稲WCS（専用品種・移植栽培）

専用品種は、収量性、耐倒伏性に優れ、茎葉を含めた地上部の収量が重視される稲WCSに適した特性を持っている。移植栽培は気象による収量の変動が少なく、雑草防除も容易であることから、収量・品質の面で安定的な生産方法である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。地上部全体の収量向上を図るため多肥栽培を行い、葉色を濃くする。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めるとともに、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

病虫害防除では、抵抗性品種を選択して低コストな防除に努める。主食用米に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため、温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制技術に取り組むことが重要である。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟たい肥を施用する。 ○ 緑肥作物を栽培・施用する。 ○ 麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壤改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 有機質肥料を施用する。 ○ 局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 除草用動物を利用する。 ○ 機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○ 温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○ たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○ 代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○ 水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○ 移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○ 健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○ 必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○ 農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ 稲WCS（専用品種・湛水直播栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ、茎葉を含めた地上部の収量が重視されるWCSに適した特性を持っている。直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、出芽・初期成育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。地上部全体の収量向上を図るため多肥栽培を行い、葉色を濃くする。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めるとともに、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

病虫害防除では、抵抗性品種を選択して低コストな防除に努める。主食用米に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため、温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制技術に取り組むことが重要である。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ 稲WCS（主食用品種・移植栽培・平坦地域）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めるとともに、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○健苗の育成、適期移植により初期成育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ 稲WCS（主食用品種・移植栽培・山間・山沿い地域）

本地域は生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。さらに、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めるとともに、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟たい肥を施用する。 ○ 緑肥作物を栽培・施用する。 ○ 麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 有機質肥料を施用する。 ○ 局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 除草用動物を利用する。 ○ 機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○ マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○ 温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○ たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○ 代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○ 水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○ 健苗の育成、適期移植により初期成育の確保に努める。 ○ 必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○ 農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

オ 稲WCS（主食用品種・湛水直播栽培・平坦地域）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、初期生育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理や適期播種などにより出芽・苗立ちを安定させるとともに、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

カ 稲WCS（主食用品種・湛水直播栽培・山間・山沿い地域）

本地域は生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。さらに、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、初期生育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理や適期播種などにより出芽・苗立ちを安定させるとともに、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) 飼料用トウモロコシ

良質なたい肥等有機質資材の適量施用により土づくりを行うとともに、局所施肥、肥効調整型肥料・有機質肥料の施用により化学肥料施用量の低減を図る。家畜ふんの過剰な施用は、未吸収窒素による環境負荷、土壤養分塩基バランスの悪化、飼料作物中の硝酸態窒素含量の増加を招く危険性があるので、注意する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 4 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥等を行う。	化学肥料窒素 成分量 16kg/10a以下
化学農薬低減技術	○抵抗性品種栽培 ○リビングマルチ栽培 ○機械除草を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) ソルガム

良質なたい肥等有機質資材の適量施用により土づくりを行うとともに、局所施肥、肥効調整型肥料・有機質肥料の施用により化学肥料施用量の低減を図る。家畜ふんの過剰な施用は、未吸収窒素による環境負荷、土壌養分塩基バランスの悪化、飼料作物中の硝酸態窒素含量の増加を招く危険性があるので、注意する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 4 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥等を行う。	化学肥料窒素 成分量 16kg/10a以下
化学農薬低減技術	○抵抗性品種栽培 ○リビングマルチ栽培 ○機械除草を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

別表 各種たい肥1tあたりの1年間の窒素有効成分量の目安

種別	有機物名	水分	窒素有効成分量
		(%)	(kg/現物t)
家畜ふん堆肥	牛ふん	50	2
	豚ふん	29	14
	鶏ふん	20	17
木質混合堆肥	牛ふん	58	1
	豚ふん	44	4
	鶏ふん	37	7
その他の堆肥	稲わら	75	1
	剪定くず	64	0
	バーク	61	0
	モミガラ	55	1

※神奈川県「環境保全型農業栽培の手引」（2001年）を参考に作成

第5 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

- 1 たい肥等の有機質資材や肥料等の適切な施用を行うには、有機物含有量等を分析項目に含めた土壌診断が不可欠であるので、農林事務所等は可能な範囲で支援する。
- 2 効率的に病虫害の防除を行うためには、病虫害の診断、発生予察及び防除要否等への素早い対応が必要である。このため、病虫害防除所等は病虫害の診断や発生予察情報の迅速な提供等により支援する。
- 3 肥効調節型肥料には、肥効発現の程度が異なるものが多くあるので、選択に当たっては農林事務所の指導を受けることが適当である。
- 4 性フェロモン剤の効果を高めるため、ほ場がある程度まとまっていることが必要である。また、性フェロモン剤の効果確認と害虫発生状況を把握するため、地域で発生予察を行うことが望ましい。このため、性フェロモン剤の使用にあたっては、病虫害防除所や農林事務所の指導を受けることが望ましい。

附 則

この指針は、平成12年4月1日から施行する。

附 則

この指針は、平成14年4月1日から施行する。

附 則

この指針は、平成16年5月1日から施行する。

附 則

この指針は、平成16年7月27日に一部改正し、平成16年7月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成16年11月1日に一部改正し、平成16年11月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成17年2月28日に一部改正し、平成17年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成18年1月18日に一部改正し、平成18年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成18年5月15日に一部改正し、平成18年7月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成19年1月16日に一部改正し、平成19年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成19年2月27日に一部改正し、平成19年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成20年4月 1日に一部改正し、平成20年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成25年4月 1日に一部改正し、平成25年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成26年3月10日に一部改正し、平成26年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成29年3月10日に一部改正し、平成29年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、平成30年3月13日に一部改正し、平成30年4月認定より適用する。

附 則

この指針は、令和2年3月6日に一部改正し、令和2年4月認定より適用する。